東京格致会会報

第7号
1999年9月
発行人・平田耕司
編集人・友広　寿

本号の内容

・私達のクラス会（会長）平田耕司
・ご挨拶（同窓会会長）伊達正治
・母校近況報告（母校校長）福永恭司
・「少子化」を考える　掛田光徳
・男、六十歳にしてマラソンに　倉元　治
・リタイア後の格致会コンペ　増山宏昭
・思い出　飛谷安宣
・学年同窓会の呼びかけ　井上由夫
・故郷紀行　白根晴輝
・帰省して想うこと　桑原草子
・人生友有り　森沢　進
・田舎の思い出　米沢武則
・平成十年総会報告
・平成十一年総会の御案内
・格致会ゴルフ懇親会のお知らせ
・基金出資者ご芳名（平成十年度分）

私達のクラス会

会長　平田　耕司

五十数年も昔、旧制の格致中学校で一緒に学んだ者達が首都圏一帯に十二名いて、時々会っては酒を酌み、或時は宿泊旅行をするなど古稀を過ぎてもなお交流が盛んである。

私達のクラス会は、正月と春・夏・秋・冬の年五回ぐらい開催し普段は東京駅とか銀座或いは上野附近のレストランに集まってお互いの健康や暮らしの状況などを確認し合うことにしている。そしてそのうち年一回は遠方に出かけ、昨年は五月に京都旅行、今年は東北旅行を計画している。

旅行の楽しみは現地の観光もあるが途中の列車内での会話もその一つ。その際は皆童顔となって、話に花が咲き故郷を想い出しながら楽しいムードで一杯になる。

私達の学年は昭和二十年三月、学徒勤労動員先の呉海軍工廠警固屋寮で、一年上級の五年終了組（私達は戦時短縮で四年修了組）と一緒に卒業式を終え、動員中の苦難も同じように体験したということから格別の親しみもあって、本年二月に有志による合同のクラス会を開催し好評を得た。今後も行ないたいと思っている。

また私達の同級に、日本美術家連盟にも名を連らねている画家八谷義登君がいて、よく一緒に上野で開催の美術展へ出かけ、彼からまじめな美術評論を聞くこともある。いずれの学年でも長年の人生で、或分野の奥義を極めた人というのはいるもので、そういう人から身近にまた親しく話が聞けるのは同級ならではと思うことが多い。

その中で本年は特に、三月「民衆を導く自由の女神展」、五月は「イタリア・ルネッサンス美術展」、六月「ワシントン・ナショナルギャラリー展」とたてつづけに世界の最高名画を直接に、しかも解説つきで鑑賞することができた。

現役時は国内或は海外出張にしても仕事が中心であって、観光や美術鑑賞は容易ではなかった。しかし今は違って心のゆとりも、また時間も充分にあって、それらに熱中することができる。

ところで私達のクラス会の諸行事は、体調や仕事上の都合で参加できない者もあるという点を配慮しながら私から提案することが多い。恐らく他学年でもそのような世話人がおられることと思う。特に私達老年者にとっては健康管理上でもこのクラス会は貴重な存在であり、そして残された人生を大いに楽しみたいものだ。そして、世話人として今後とも自らの健康にも留意し、このクラス会を大切に考えて皆へ呼びかけようと思っている。

（昭和二〇年卒）

ご挨拶

同窓会長　伊達　正治

〈略歴〉
広島県立庄原格致高等学校長
広島県公立高等学校長協会会長
文部大臣教育表彰受賞
勲四等瑞宝章叙勲受賞

〈現在〉
広島地方裁判所司法委員
キャピタル福祉専門学校常任理事

東京格致会には昭和五十七年、私が在職中にご招待にあずかりまして以来、今日までご無沙汰致し恐縮に存じております。

あれから早くも十五年の歳月が経過していますが、今回、格致同窓会長として再び東京の会員の皆さま方とお近づきのご縁ができましたことを、誠に嬉しく存じております。

母校は平成九年に創立一〇〇周年記念を迎え、また今年五月には第二グラウンドの竣工記念が盛大に挙行されました。

ご承知のように、「君が代」「日の丸」問題で広島県教育界は大きく揺れていますが、母校格致は毅然・泰然として物心両面にわたり充実した教育活動が実践されていることは同慶の至りです。

格致同窓会も一〇〇周年を機会に、多数の卒業生の方々の結集をみることができましたが、今後は更なる同窓会活動の充実と発展を期するため、一万五千名にのぼる卒業生の皆様一人ひとりの消息をたずねて、確かな基盤をつくりたいものと念じております。そして同窓会が、より身近で親しい「心の栄養剤的な存在」となるよう努力しているところであります。

「母校」とか「同窓」という言葉は不思議にもなつかしく優しい響きがあり、親しい思いと郷愁を覚えさせる魅力があります。そして社会的地位や名誉などすべての衣を脱ぎ捨てさせ、桜花爛漫の春に入学し格致で生活した青春時代にタイムスリップさせてくれます。

若さと情熱と夢をもって学友と交流した母校での尽きぬ思い出は、明日を生きるエネルギーの大きな糧となります。同窓会の存在意義はまさにここにあると思います。

東京を中心としてご活躍されている格致卒業生の方々のご協力を賜り、同窓会が一層広がり深まって参りますよう期待致しております。

東京格致会の益々のご発展と卒業生各位のご健勝を祈念してご挨拶といたします。

（昭和一八年卒）

母校近況報告

広島県立庄原格致高等学校長
福永　恭司

故郷庄原地方ではゴールデンウィークにあわせたように田植えを終え、水面に早苗がならび、むかしから瑞穂の国として自然と共存してきた祖先の人々の生き方に、あらためて驚嘆と感謝をおぼえます。

連休はじめから五月晴れがつづき、乾燥しきった大地に昨夜来の突然の雷雨、ちょうど砂塵をおしとめるように水をまいたような一万平方メートルの第二グラウンド、となりの戸郷川や新しく造成された市のゲートボール場の芝生を緑濃くひきたたせ、五月一六日の朝が明けました。待ちに待った第二グラウンド竣工記念式のテープカット、ラグビー招待試合の幕が開きました。

わが校自慢の吹奏楽部によるマーチングによりファンファーレが高らかに響きわたり、軽快でコミックな動きでグラウンド狭しと展開されました。ひきつづき全校生徒による組体操の演技が力強く披露されました。

創立百周年記念事業に間に合わせるようにと同窓会をはじめとした関係者のご努力により進められてきた第二グラウンドの完成は伊達正治会長が率先して、「百周年行事の一環として竣工記念を支援していこう」と呼びかけられ、PTAと協賛して実行委員会を発足させ第二グラウンド竣工記念事業の実施の運びになったものです。

前日の記念式典とそのあとの記念講演では、全国のトップレベルにある京都市立伏見工業高等学校ラグビー部総監督山口良治先生（現在は京都市役所の部長で、無名のラグビー部を今日までに育てられた方）から「信は力なり」という演題でお話をお聴きしました。その先生が顧問と部員をひきつれて招待試合に参加してくださったわけです。相手は昨年全国準優勝、これまでにインターハイ二回、国体三回の全国制覇をなしとげたチームです。講演の中では「どんなに施設が立派になっても、生徒にやる気がないなら全国に通用するチームにはなりえない。明日の試合では負けるくやしさを体験してほしい」と話されました。

開始後前半は七－五で本校がリードする場面もあり最終的には地力に勝る伏見工業に七－五五で敗れはしましたが「汗と涙」の格致魂と「格物致知」の精神を存分に発揮して観衆に応えてくれました。

卒業生の進路状況ですが、それぞれが目標に向かって努力を重ね、広島大、早稲田大、京都教育大、北九州大、岡山大、広島県立大、大阪外語大、広島女子大、山口大、下関市立大、鳥取大、島根大、立命館大等一三二名（八四パーセント）の者が大学進学を果たし、二一名（一三パーセント）の者が専修・専門学校に進んでいます。

終わりにあたり、東京格致会員の方々の今後の益々のご活躍とご健康を祈念いたしますとともに、本校への一層のご支援をお願い申し上げます。

「少子化」を考える

昭和二六年卒　掛田　光徳

先頃のNHKのテレビ放送で、このままで行くと「八〇年後の日本の人口は現在の約半分になる」と少子化問題を取り上げたらしい。番組を見ていないので内容については何ともいえない。だが最近問題になっている少子化について、私なりに考えたことを思いつくままに記してみたい。

八〇年先というとそんなに先のことではない。もちろん、私達は生きている気遣いはないが、今年生まれた赤ん坊が八〇歳のお爺さん、お婆さんになった時だと思うと俄かに現実的に思えてくる。

さて、昔から人間が生活して行くための条件として、衣・食・住の三つが挙げられている。人口が半分になるとどうなるか。第一に「衣」即ち衣服は当然ながら半分しか要らなくなる。次に「食」これも考えるまでもなく半分で済む。現在でも「米」余りで困っている位だから田圃も半分でよい。「住」即ち住居も同様だ、逆に考えると凡そ二倍の広さの家が持てることになる。

家電商品や消費物資を生産する工場なども大半がなくなる。すでに住居余りの状況は現実になりつつある。我が家から一五分あまり行った所に最近完成した三百戸ほどの公営住宅がある。

入居者は凡そ半分あるいはそれ以下だ。夜など散歩途中に見てもポツン、ポツンと灯りが点いている様は何とも寂しい。

車も交通量も電気もエネルギーも半分、あるいはそれ以下で済むことになる。

ゴルフ人口も減る。不要になったゴルフ場や田圃は植林でもして元の山林や原野に、工場跡地は緑豊かな公園にすればよい。

通勤電車も、ユッタリと座って通えるようになるだろう。道路もスイスイ、渋滞などは過去の話。ゴールデンウィークや夏休み、あるいは年末年始の帰郷客や観光地への民族の大移動による異常な混雑など昔話になるだろう。

交通渋滞による直接、間接的な損失は国家単位でみると莫大なものだ。

子供達も受験戦争から開放されノビノビした学校生活を送れることになる。

結果として実に人間性豊かで快適な個人的、社会的生活がエンジョイできることになる。これこそ我々が必死に追い求めている理想ではないか。

心が豊かになれば、全てにゆとりが出てくる。そうなると犯罪も減るだろうし、学校での「いじめ」や学級破壊なども解消し、大人の世界では犯罪も減るだろう。役人も警官もウンと少なくなる。社会コストも減ってくる。税金も安くなる道理だ。

今、我々が直面にしている様々な社会問題即ちごみ処理、環境破壊、公害問題、地球温暖化など、ほとんど何の投資もしなくて全て解決できるといって過言ではない。

このように考えると、我が日本の未来は実に明るいではないか。

「少子化」実に結構だ。今や「生むな増やすな」がベストの選択と思える。

明治から始まるわが国の戦争の歴史を振り返ってみて欲しい。いずれも人口の増大に伴って海外に領地を求め進出し、結果として紛争を起こしたのではなかったか。

わが国内外に不幸をもたらした原因は全て国威発揚を掲げ、「生めよ増やせよ」と人口増加を奨励した戦前の政策が間違っていたのではないか。

わが選良諸氏においては、目前の諸問題はさておき、国家百年といわず八十年の計を建て、充実した少子化政策を立案し推し進めてほしいものだ。

当然ながら、少子化に伴うマイナス面も出てくることは想像に難くない。しかし、こういう見方、考え方も一考の余地ありと思うが如何だろうか。

男、六十歳にしてマラソンにはまる。

昭和三〇年卒　倉元　治

はじめに

私は昭和三〇年三月に庄原高等学校（当時）を卒業しました。以後母校を訪れることもなく四十数年が過ぎました。最近歳のせいか昔を懐かしむ気分になりつつあるのが現状です。

当時から私はスポーツには無関心（勉強には最初から無関心）で、中学を卒業してから百メートルより長い距離を走ったことはありませんでした。そういう人間が六十を過ぎて「何故マラソンをはじめたか」を書いてみたいと思います。

一

社会人になってから、猛烈社員とはいわないまでも、時代が時代だっただけに高度経済成長期を支えたサラリーマンだったと思います。仕事一途に会社生活を送り不動産関係の業務に励んで来ましたが、五九歳の時土地の実査に出掛け小さな溝をピョンと飛んだところ、股関節を痛め肉離れを起こしてしまいました。毎晩酒を愛し殊のほか日本酒を愛したツケが回って来たものでした。運動しないと体がだめになると思い、ウォーキングを始めました。

二

ウォーキングを始めて六ヵ月後、私が住んでいる横浜市栄区主催の三・五・一〇キロのロードレースがあり、三キロの親子レースに大人だけで参加したのが、マラソンを始めた切っかけです。その時はたったの三キロのレースでしたが、何しろ生まれて初めて走るものですから、今までの仕事以上の大事業を完成したような気分でした。

この話を書道仲間の東京ランニング愛好会の会長にしたところ、ぜひ皇居マラソンを走れと誘われました。

血液型がO型のせいか、誰とでもよく喋るためレース中に仲間ができ、意気投合し以後ずっと一緒に走るようになりました。

三

健康指向の高まりからかマラソン大会が増え毎週日本中、世界中でマラソンレースが行われています。健康のため無理なく一週間に三回くらい練習した方がよいといわれています。私はレースに出るのが練習と仲間と一緒に毎週のように何処かのレースに参加しています。ハーフマラソンが主体ですが、北海道から九州、北米やヨーロッパまで参加するようになり、カミサンには怒られながら、ますますマラソン熱が高まっています。

今までせいぜい三〇キロ止まりでしたが、昨年から東京荒川、霞ヶ浦のフルマラソンにエントリーし五時間以上かかっていますが、完走するようになりました。

四

苦しんで走って、どこがおもしろいのとよくいわれますが。マラソンを始めて新しい世界が開けてきました。無理をしないで楽しんで走ると、レース自体がおもしろくなります。新しい仲間ができ、地元の人と交流ができ、健康にもよいとなると、いいことずくめです。

一番の楽しみはレース後の仲間との「酒盛り」です。すべてのストレスから解放され、至福の時です。

取引先で六十歳過ぎてからマラソンを始め、ついにフルマラソンを完走したと話したところ、そこの社員で新しい仕事にチャレンジする時に、倉元さんは六十歳からマラソンを始め完走したと引き合いに出されました。そして自分はまだ若いから新しい仕事に十分成功できると退職を決心したと聞き、ああ自分も若い人の意欲を高めるのに役立っていると満足したものです。レースで走っている時、地元の人に「頑張れ」英語で「ゴウゴウ」仏語で「アレアレ」と応援してもらうのが嬉しくて人生の後押しをしてもらっている気分です。今「南栄マラソンクラブ」の会員を募集しています。中高年の健康志向の方ぜひ参加ください。

リタイア後の格致会コンペ

昭和三〇年卒　増山　宏昭

平成一〇年一〇月一七日(土)、緩やかな丘陵地にのびのびと展開するコース、一の宮カントリー倶楽部（千葉県）東コースに於いて、第一九回格致会コンペが開催され、一三人が参加した。優勝は、メンバーズゲストの三村省二氏で、小生は二位であった。

リタイア後のゴルフコンペに参加した感想は、定年退職後の心配の種として、人づき合いと健康が考えられ、これらに備えるものの一つとして、ゴルフは一挙両得の感じがする。

長い人生の中で、夢とロマンの多い三年間の青春の思い出は、人づき合いの上で共通の話題となり、貴重な潤滑油として、人間関係が深耕されて行く感じがする。

旧交を温め、心地好い汗を流す、格致会コンペに参加してみませんか!!

思い出

昭和三二年卒　飛谷　安宣

「格物致知」（天地の大道に則って知を磨く）という教育の理念を掲げ、県北の学舎「格致」が誕生して今年は百二年だそうで、実に一世紀という長い歳月を経過しています。その間には私学から公立へ、旧制中学から新制高校へといった学制改革、不測の出来事（火災による校舎の全焼）、さらには幾度かの校名変更などいろんな変遷を経て今日に至っています。

私が母校へ入学したのは昭和二十九年で、校名は比婆西高校。その年の五月には庄原高校へと名称が変わり、卒業も庄原高校でした。校舎は現在格致がある三日市の松原原頭ではなく、本町の実業の一角にありました。先日図書館へ行ってその当時の新聞記事を拾い読みしてみました。

その頃は神武景気と称された時代で、一万円札が初めて発行され、ソ連からの引揚げ船「興安丸」が一〇二五人を乗せて感激の舞鶴帰港、今ではほとんどニュースになりませんが、南極観測に関する記事が「宗谷東京港出港」「長い間の夢南極大陸第一歩」といったような見出しで連日紙面を賑わしています。シンタロウ刈り、映画「太陽の季節」が大当たり、アメリカではエルヴィス・プレスリーが大人気、東京タワーが完成したのもその頃、半世紀という時の移ろいをつくづく感じます。

本年度、国の予算は八一兆八六〇一億円ですが、昭和三十一年度は一兆二九五億円ですから、国の財政は実に八〇倍に膨らみ、経済は大きく伸びております。この間に日本の社会構造が大きく変わったり、世界の中での日本の地位は様変わり、一方で日本人の価値観が多様化し、社会のいたるところに病理現象ともみられるものが出ている昨今であります。

美空ひばりの唄「川の流れのように」の一節に、「知らず知らず歩いてきた細く長いこの道、振り返れば遙か遠く故郷がみえる」というくだりがありますが、いま改めて自分の生きざまを振り返ってみるとき、この詞の思いを強くいたすと同時に、高校時代がついこの前のように思い起こされ、喜怒哀楽いろんな出来事がすべて懐かしい思い出として、走馬灯のように脳裏に浮かんできます。

毎年首都圏に在住する者が東京に集まっ

て同期会を開いていますが、出席者全員、高校時代と同じ精神状態で過ごす数時間であります。元気で出席できる幸せを感じる楽しいひと時でもあります。

昨今、世の中の変化には目まぐるしいものがあり、きのうまでの常識がきょうは通用しないこともあります。その時どきに決断し、対処しなければならない事態が起こってきます。ノウハウがあって、目標のはっきりしていることをやるのでしたら、経験とか時が解決してくれることにもなるでしょうが、今の時代は必ずしもそうはいきません。

私は日頃から蛸壺の中にはまって物事を考えるのではなく、複眼をもって心思を百方に馳せ、自らを常に緊張状態におきながら、いついかなる事態が起ころうとも気力を充実させ、常に前を向いて対処するよう心掛けております。

「生き甲斐」これはあくまで自分が作るもの、人はそんなものを与えてくれません。仕事だって、家庭だって……。今日という一日をしっかり生きたときの〝充実感〟その積み重ねこそが人生の〝生き甲斐〟ではないでしょうか。

人の一生は、重き荷を負うて遠き道を行くが如しと申します。悩みを背負いながら、日々を精いっぱい過ごしていく、これぞわが人生であります。この原点は、母校在学時代に培われたといっても過言ではありません。

学年同窓会の呼びかけ

昭和四一年卒　井上　由夫（旧姓末信）

格致高校を卒業して早三十三年になります。平成八年八月、すでに三年たってしまいましたが、庄原グランドホテルで学年同窓会が行われました。

会場に着いて参加者を見渡すと、一目で名前が思い出せる人、暫くしてからあの頃の面影を思い出す人、全く見当のつかない人など様々です。団塊の世代で、学年総数二九〇名余りのうち、一〇〇名弱の参加でした。中にはすでにおばあちゃんやおじいちゃんになった人もいるようでした。

まずは、田森先生を中心とした視聴覚委員会制作の『格致ニュース一九六三年版』が映し出されました。体育館もなく、狭い校舎での入学式、長靴姿の対面式、長い距離を歩き、校歌・応援歌を練習した七塚原遠足、山口県光市での臨海学校、校内体育大会など当時の活動が懐かしく、ビデオの中の若い顔ぶれを見ては、皆、ため息をつき、昔の世界にタイムスリップした思いでした。

出席された先生方は、三谷先生、野宗（旧姓黒木）先生、田森先生、増原先生、金銅先生で、どの先生も当時の思い出を語って下さり、いつまでも若くお元気でした。また、地階での二次会へと話は尽きることなく、楽しい一日を過ごしました。

東京格致会も毎年案内を頂くものの、参加したのは五年前の一回のみです。深谷から出かけるには二時間もかかる上に、同期の参加者も少なく、なかなか足が向きません。

そこで、会報でも呼びかけられていますが、東京格致会でも、学年同窓会を開けたらと思います。十月二日の東京格致会総会には一人でも多くの方に参加して頂き、昭和四一年卒の学年同窓会の打ち合わせができればと思います。

［基金出資者ご芳名］（卒業年次順）

（氏名）	（年卒）	（氏名）	（年卒）
足立　勇	20	小池　正之	38
渡辺　武臣	20	都甲　英範	40
下川床文枝	26	本間ますみ	49

故郷紀行

昭和四九年卒　白根　晴輝

少し古い話になってしまいますが、昨年八月に小学生の子供たちを連れて庄原へ里帰りをしました。

私の母親が亡くなって以来、子供たちは田舎へ行ったことがありませんでした。夏休みにどこへ行こうかという話から急拠田舎へ行こうと決めました。

帰る前にインターネットで〝庄原市〟で検索すると、観光協会をはじめとしたホームページが見つかり、大変懐かしく毎日のようにいろいろなホームページにアクセスし、帰郷を楽しみにしていました。

帰郷するに当たり、大人二人、子供二人がどの方法で帰れば一番安上がりかを考えたりしましたが、結局子供たち二人は〝のぞみ〟に乗りたいという強い希望で新幹線、私たち夫婦は車で子供達が出発する前夜に出発しました。

途中浜松で一泊し、朝から東名・名神・山陽道を走り一路広島駅をめざしました。渋滞もあったのですが、午後二時ぐらいに岡山で子供に持たせた携帯に電話すると、子供たちの乗った列車はちょうど名古屋を過ぎたあたりでした。

順調に行くと子供たちの到着する約一時間前には広島駅に到着予定で午後四時過ぎに到着し、子供たちと合流。中国道にて庄原に到着しました。

田舎にはちょうど同じぐらいの従妹がおり話も合うようで、翌日は家の前の木村川で遊んでいました。河川改良が行われ自分の小さい頃のイメージと大きく変わっており、水量も少なく、魚も少なくなったような気がしました。

ただ目の前の山や友達の家はそのままであり、何かほっとするものを感じました。また話を聞いてみると以前に比べ蛍が増えたそうです。

今回の帰郷では寄ることができなかったのですが、国兼池周辺が国定公園として整備されており、色々なイベントが行われたり、今年の夏にはオートキャンプ場がオープンするとのことで、他府県ナンバーの車で賑わうのではと思っています。機会があれば一度訪ねてみようと思っています。

私は現在日新航空サービス株式会社という旅行代理店に勤務しており、扱いのほとんどが海外旅行、海外出張のお客様のため、国内はあまり扱いは多くないのですが、少しでも皆さんに知ってもらえればと思います。

庄原で三泊し、思い出を一杯つめて子供たちと車で東京へ帰ってきました。途中静岡で一泊し海水浴も楽しむことができました。今年の夏休みは、開通したばかりの「しまなみ海道」というリクエストが出ており、四国から田舎を目指そうかと密かに考えています。

帰省して想うこと

昭和四〇年卒　桑原　草子

数年前から年に三度くらいの割りで帰省している。二十代、三十代の頃には、一度も帰省しないような年もめずらしくなかったが、最近は、故郷が急にまた近くなったような気がする。はじめは、老いて故郷にふたりで暮らす両親のために帰る、というのが帰省の直接の動機だった。しかしいまでは、両親のためもさることながら、私自身がときどき田舎でほっと一息吐きたいという気持ちも強い。

二十代、三十代の頃は、外国へ行ったり、どこか遠くへ遠くへと向かっていた自分の心が、今は、だんだん自分の生まれた場所へ向かって帰って行こうとしているようで、こういうのを還暦というのかなあ、と思ったりする。実際の還暦にはもう少し間があるが……。

それにしても五十を過ぎて、還暦に向かい、自分の心が再び自分の生まれた処へと向かい始めたとき、そこにまだ両親がいてくれるとは、おもえば有り難いことである。

ところで、だれでもそうだと思うが、故郷に帰ると、長い間ずっと忘れていたものを、急に思い出すことがある。

この五月、一週間足らず帰省したときは、夜の蛙の大合唱を二十年ぶりに聞いて、「ああ、そうだった」と、目が覚めた様な気がした。

蛙の大合唱とか、蝉時雨とか、しばらく聞いているとそれ自体が、巨大な静寂のように感じられてくる。あの子供の頃の感覚を思い出したのである。

今年の正月、夜中に起きてふと庭を見ると、地面に木の影がくっきりと映っている。月明りである。「まるで昼間のようだ」と思ったそのとき「昼のように明るい」という月夜の形容があったことを思い出した。こんな言葉はもう長い間思い出したこともなかった。

いま東京のわがマンションの近くのスーパーマーケットは深夜一時まで営業しており、全店ピカピカと白い蛍光灯に照らされている。昼間より明るいような人工の光である。

この灯には、深夜に買い物をする一人暮らしのサラリーマンの悲哀がこもっている。これはこれで、悪くはないのだ。と思ってはみるものの、やっぱり、田舎の実家の荒れた庭に射す月光が恋しい今日この頃である。

人生友有り

昭和三三年卒　森沢　進

昭和三三年三月、庄原高校を巣立ち、今、改めて思い返せば、四〇年余りの歳月が過ぎ去っていました。

当時の日本はまだ発展途上国の段階、私的にはこれからの人生の前途に思いを巡らし、悩み多き青春の時期でもありました。

どうせ同じ一生なら日本の中心東京で暮らしたいの思いにかられ、急行〝安芸〟の夜行列車に揺られ第二の人生を目指して、上京。

以来学業を終え、エネルギー会社に職を得て、しだいに高度成長の波に乗る日本経済の波間を、北は北海道から南は大阪まで全国各地を転勤生活。

そんななか八王子市在住で三十代そこそこのある時、中・高とも同級のI君とG君が首都圏在住で各々奮闘中と知り、即刻卒業以来十余年の空白時間を引き戻し、以来家族ぐるみの付合はもとより、ドライブに温泉旅行に、またある時は銀座で、一杯では終わらず、カラオケにと旧交を温めて来ました。

とくに近年、私も首都圏に落ち着いたため正月の明治神宮参拝に始まり、県人会・格致会・ゴルフ会等、機会あるたび顔を合わせ、少年時代の事や古里の情報、そしてまた人生談にと花を咲かせながら現実社会の疲れを互いに癒し合っています。

三人ともまだまだ現役で負けん気は人一倍。格致会恒例のゴルフコンペでは、I君が優勝を決めると、私も負けじと次を狙えば、G君も決して後に引かない根性。三人めでたく連続優勝の快挙を果たしたりした。

思い出も喜びも常に共有しながら、ゴルフ上手なI君、カラオケ好きのG君、そして冬も真夏も熱燗にこだわる私と、三人の同併人生はこれからも続くことでしょう。

I君こと東洋証券㈱専務の生田八洲紘君、G君こと銀座の主、宝石商㈱みつわ、次長の合田良三君、私はといえば埼玉県西部の日高市で市民に都市ガス供給の毎日です。

両君とも私の人生の至宝であり、母校格致ともどもこれからも大切に懐ろにしまっておきたいと思っています。

庄原格致高校の教育目標

一、人間尊重の精神に基づいて、平和で差別のない社会づくりに貢献する人

二、誠実で、努力を惜しまず、明朗で協調性のある人

平成十年度総会

平成十年度の総会もお蔭様をもちまして、無事に終了し、又次回の再開を誓いながら親交を深める事が出来大変有意義な一時でした。

今年の総会は、各卒年の方々の参加をお願いしてありますので、それぞれ、知人、友人をお誘いの上、多数の方の御出席をお待ちしております。

平成八年・九・十・十一卒の新人の参加も期待しております。

東京格致会役員構成

（平成11年度）

〈顧問〉
永井　岩（T8）
吉方貞巳（S10）
細川譲三（S16）
沼越達也（S22）
藤高　明（S27）
・田部幸雄（S10）
・長井一美（S15）
・塚本幸三（S19）
・新見義明（S23）
・宗国旨英（S32）

〈会　長〉
平田耕司（S20）

〈副会長〉
坂井昌彦（S24）
酒井久幸（S25）

〈幹事長〉
友広　寿（S27）

〈副幹事長〉
兼利卓蔵（S28）

〈事務局長〉
明賀　馨（S30）

〈常任幹事〉
小島芳元（S23）
金森裕雄（S25）
加藤哲治（S30）
渡利治博（S31）
信清　治（S31）
積山弘佳（S35）
新宅一二三（S42）
西谷光徳（S46）

〈監　事〉
室伏孝一（S25）

積山　弘佳（昭三五）
生田　八州紘（昭三三）
渡利　治博（昭三一）
増山　宏昭（昭三〇）
合田　良三（昭三三）
迫田　芳徳（昭三四）
信　清治（昭三一）
米沢　武則（昭三四）
山田　健太郎（昭二三）
八谷　英樹（昭三五）
明賀　馨（昭三〇）
清水　虎夫　実業東京福支部長
陰田　康行（昭三四）
森戸　昭夫（昭二四）
沼越　達也（昭二二）
加藤　哲治（昭三一）
藤高　明（昭二七）
熊原　清（昭三四）
近藤　正昭（昭二八）
金森　裕雄（昭二五）
室伏　孝一（昭二五）
酒井　久幸（昭二五）
田中　茂樹（実業）
加藤　敬弘（昭三四）
長井　一美（昭一五）
世良　善弘（昭二七）
平田　耕司（昭二〇）
風呂田　哲生（昭二七）
福永　恭司　校長
友広　寿（昭二七）
片山　孝昭　同窓副会長（昭三三）
渡辺　昭典（昭二〇）
田部　幸雄（昭一〇）
八谷　義登（昭二〇）
細川　謙三（昭一六）
堀井　昌洋（昭二〇）
滑　年男　実業東京支部長
森沢　進（昭三三）
坂井　昌彦（昭二四）

田舎の思い出

昭和三四年卒　米沢　武則

今年五九歳になり、あと一年で還暦を迎える年になりました。

定年が近づくと、子供の時に過ごした田舎のことをしきりに思い出します。

私の家から濁川の田川小学校まで約四キロありました。通学路沿いにあった柿はすべて甘い渋いがわかっていたし、夏には西城川沿いに帰り、コイ、フナを始め、時にはウナギやナマズを手でつかみ家に持って帰り貴重なタンパク源にしたものです。

秋には山の中を遠回りして帰り、山のアケビ、山栗を食べて少しでも腹のたしにしたり、一本ヒメジを始めいろいろな茸類を取って帰り母を喜ばしたものです。

冬にはできるだけ学校から早く帰り、いろいろな所に罠を仕掛て山鳩を始め、名前も知らない鳥を取って焼鳥にして食べたりしたものです。

いろいろ記憶をたどって見ると、一年中食べる事と関係のあることをしていたみたいです。

四年前に父が他界して、法事以外は田舎に帰ることはなくなりましたが、田舎に帰る回数が少なくなればなるほど、田舎で過した楽しい思い出を今強烈に思い出します。

川蜷が取れホタルが飛び、星のキレイな田舎は私の頭の中に鮮明に残っています。

定年になったら田舎に帰って暮らしたいなあ、横浜生まれの妻にはないしょです。

現在、首都圏にて就学中の皆さんを紹介（20名）

氏名	卒業年	氏名	卒業年
荒木　嘉夫	平8年	大門　真紀	平10年
原田　雄太	平8年	近藤　真智子	平10年
斎森　弥生	平8年	中田　知宏	平10年
片山　亜希子	平8年	松田　奈央美	平10年
沖田　晋耶	平9年	風早　伴弘	平11年
片山　直樹	平9年	名越　一馬	平11年
永戸　里枝	平9年	藤井　紀彦	平11年
中上　比呂志	平10年	前山　仁美	平11年
酒谷　和宏	平10年	森江　修也	平11年
萩山　大雅	平10年	津田　尚広	平11年

東京格致ゴルフ懇親会へのお誘い

平成元年の秋から、平成一一年六月までのゴルフコンペは二〇回を数えるようになりました。

酒井久幸さんのホームコース、千葉県一の宮ＣＣが定例開催コースとなって、この数年は約一二名と、酒井さんのご関係の同コースのメンバー三名が加わっていただき和気あいあいの中で行っております。

平日のグリンフィーの安価なコースでとの意見もありますが、平日は仕事の関係で参加不能の方も多く、一の宮ＣＣでは、サービスもあり、土曜日の開催となっております。

往きは東京駅八時の特急、帰りは車中に飲み物を持ちこんで賑やかに、和やかに一杯飲みながら広島弁も出て楽しく語り合っています。

スコアも気にする方もあれば、往復の車内の懇談を楽しみに参加する方もあり、ゲストの一の宮ＣＣのメンバーの方も、庄原へ旅行され、庄原ＣＣでプレーされた方々で、話が盛り上がっております。

開催は年二回で、六月と一〇月を予定しております。同年代の方とお誘いになれば、同じ組でプレーもできますので、気楽にご参加をお待ちしております。

本年も一〇月の総会のあとになる予定で、一〇月九日㈯一の宮ＣＣと計画しております。ご家族、友人のお誘いも歓迎いたします。

室伏孝一（二五年）

連絡先は、
◎酒井会計事務所
電話〇三（三二五五）八九九五
◎室伏孝一
電話〇四八（八六二）五六九八

平成十一年度総会の御案内

同窓各位におかれては益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて本年度　東京格致会総会並びに懇親会を下記により開催いたします。万障お繰合わせの上ご同級等をお誘いいただき多数の方々のご参加を期待しております。

母校の福永校長先生の近況報告にもありますように百周年後の学校施設はさらに充実し、卒業生の進学も飛躍しておりますが、今回は首都圏在学中の卒業生を招待することにいたしました。

ここに総会開催のご案内を申し上げご参加くださいますようお願いいたします。

なお準備の都合上、お手数ながら九月二〇日までに同封の葉書でご出欠をお知らせください。

平成十一年八月

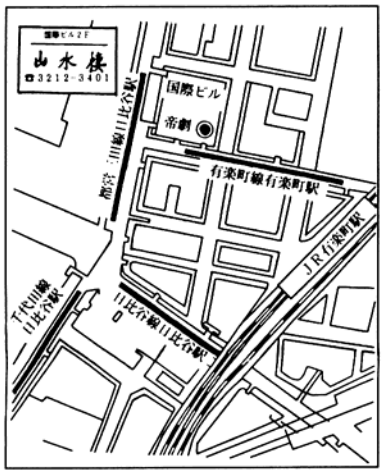
東京格致会会長　平田耕司

（記）

一、期　日　平成十一年十月二日（土）午後二時より

二、場　所　山水楼
千代田区丸の内三－一－一
国際（帝劇）ビル２Ｆ
〇三－三二一一－三四〇一

三、会　費　総会費　八、〇〇〇円
年会費　二、〇〇〇円
学生　無料



●年会費についてのお願い●事務局

東京格致会は、平成五年から年会費（年額二千円）をお願いしています。

この年会費は、会報の発行、総会・役員会等の会合案内状印刷費用及び郵送料、母校派遣者に対する旅費一部負担、その他経常的運営費用にあてられています。

とくに会報の発行は、故郷情報を含め会員の皆さんが最も興味をもたれているだけに今後益々充実しなければならない課題です。

そうした内容に支途される年会費ですが、現在七〇余名の方々からご協力を頂いていますものの、これら経常的費用を充足していないため、本年度年会費をお支払いになっていない方は、ぜひともご協力をお願いいたします。

★年会費（二千円）振込先
郵便振替　〇〇一五〇－七－一二九五〇
東京格致会

なお、総会出席者はその際総会費とは別にこの年会費を支払われても結構です。

（編集後記）

今回も多数の方々より御寄稿戴きまして、ご覧の通りの会報ができ上りました。紙面を利用して、お礼を申しあげます。

次回にも、会員の皆様の原稿をお待ちしております。又今回は、総会を盛り上げるため、名簿からランダムに選ばせていただいた、各卒年ごとの二名の方に、それぞれの学年の方々の総会のご参加をお誘い下る様お願いして居ります。何卒ご協力のほどお願い致します。（T）

「東京格致会会報」第七号
平成十一年九月一日　発行
発行人　平田耕司
編集人　友広　寿
事務所　東京都千代田区神田淡路町二－一三－二八
酒井会計事務所内
電話〇三（三二五五）八九九五
連絡所　東京都練馬区東大泉七－一二－二八
友広　寿　電話　三九二三－四〇二五
《振込口座》
◎年会費　郵便振替　〇〇一五〇－七－一二九五〇
東京格致会